

世界結晶年 IYCr (International Year of Crystallography) 2014

オープニングシンポジウム 挨拶

世界結晶年のオープニングシンポジウムが、日本学術会議化学委員会 IUCr 分科会と同化学委員会・物理学委員会合同結晶学分科会の主催、世界結晶年日本委員会、日本結晶学会、日本結晶成長学会の共催によって開催されることを祝し、日本学術会議を代表してご挨拶申し上げます。

我々の物質への関心は結晶に始まるといってもいいかもしれませんが。個人的にも、小学生の頃には岩石を採集して、標本をつくる趣味を持っていたので、山野や河原で、きらりと輝く結晶状の岩石を発見すると嬉しくなったものです。結晶の持つこうした外形に関する興味から、その内部構造の解明に踏み込んだのが現代結晶学の黎明であり、ちょうど 100 年程前に、マックス・フォン・ラウエによる X 線回折現象の発見、ブラッグ親子による X 線回折現象を利用した食塩の結晶構造の解析というノーベル物理学賞を授与された研究が行われたということです。

同じころ、日本でも寺田寅彦や西川正治が結晶構造分析の研究を

行っており、世界の最先端の動向と一体となった研究活動が行われていたこととなります。その後の結晶学は、自身の発展とともに、原子・分子の構造解析といった基礎物理学の発展、物性を踏まえた新素材の開発による種々の産業への貢献、結晶の内部構造の解析手段としての電子顕微鏡等機器の開発、タンパク質の構造決定等、多様な方向への研究発展を促していきました。もとより、私は、結晶学の最先端の動向に通じているわけではありませんが、日本が最先端に位置する分野の一つであるとの国際的な評価を得ていると認識しています。

今日のシンポジウムは、そうした背景を持つ国際結晶年のキックオフとして開催されます。国際結晶年は、2012年に国連総会で決議されたもので、全世界の団体・個人に呼びかけられています。国連のこの催しは、1957年の国際地球観測年に始まったのですが、この時に、日本学術会議も、我が国の諸観測機関の要請を踏まえて、積極的な参加を表明し、第2次大戦で途絶えていた科学研究における国際協力の復活の足がかりとしたのです。その意味では、世界の科学者や人々に対する国連の呼びかけが、置かれている状況によって、とりわけ重要な意味を持ちうることを忘れてはならないと思

ます。今年を、単に我が国における結晶学の一層の発展の契機とするだけではなく、特にこれからより本格的にこうした分野の研究に取りかかろうとする国々の科学者とも積極的に研究交流を図り、結晶学の国際的な発展に寄与する活動も是非進めていただきたいと存じます。

最後に、日本学術会議の活動について触れます。日本学術会議は、3年を1期とする活動サイクルを取ってきており、私どもの22期は今年9月に終了します。現在は、多くの委員会や分科会が審議の取りまとめの過程に入っており、期末には、恐らくこれまでの期をかなり上回る数の提言等が出されることになると思います。同時に、新しい期を迎えるために、コ・オプテーションによる会員・連携会員の選考が本格化しようとしています。コ・オプテーションとは、現在の会員・連携会員自らが、新たな会員・連携会員を選ぶ仕組みで、日本学術会議では長年の試行錯誤の結果として、この制度を持つに至っています。この制度は、まさに主体的に組織を構築していく積極的な意味を持つ一方で、自らが選ぶという点で、近い後継者を選びがちであるという傾向をはらんでいます。これが昂ずれば、今の会員や連携会員の中には数の上で少ない女性、地方在住の科学

者、大学以外の公的及び民間の研究所の科学者、境界領域等少数になりがちな分野の科学者、さらに若手の科学者等が選考され難いという欠点を持つことも指摘されています。こうした欠点を克服し、長所を伸ばしていくためには、この会場にも沢山いらっしゃる会員・連携会員の皆さんが、社会に科学を役立たせる活動を担う新たな人材を発掘して、積極的に推薦していただくことが必要です。

改めて、国際結晶年がこれから 1 年間の活動で大きな成果を上げることに期待するとともに、日本学術会議の活動への理解と協力をお願いして、ご挨拶といたします。

2014 年 1 月 23 日

日本学術会議会長 大西隆

於日本学術会議講堂